

僕のひいおじいさんひいおばあさん

小坂井中・2 鈴木 蒼也

僕のひいおじいさん

七月五日 九十六才で天国へ旅立った

僕がずっと幼い頃

一緒に旅行に行った

遊園地で乗り物に乗っていると

ここにこして手を振っていた

夜 同じ部屋で寝たのを覚えている

よく千円のお小遣いをくれた

「よく来たなあ また来いよ」

いつも言っていた

こちよこちよとくすぐってきたり

頭を よしよしとなでくれたり

いつもひいおじいさんの手は

温かった

九十才を過ぎても車の運転をしたり

草刈り機で草を刈ったり

とにかくいつも体を動かしていた

そんなひいおじいさんが大好きだった

二週間後

ひいおばあさんが九十五才で旅立った

元気だった頃

「大きくなったねえ いくつになった？」

いつも聞いてきた

「十四才」と言う

また次も同じ質問をしてくる

「さつきも答えたのになあ」

と思っていた

「ヤクルトは飲むかん？」

次は ヤクルトの出番だ

「ありがとう」と言う

にこつと嬉しそうな顔をする

僕も その顔を見ると嬉しかった

今年のお正月

曲がった体でも しつかり歩いていた

僕たちと いつもよりたくさん話していた

その時 ひいおばあさんが

「もう今年が最後かもしれない」

と言った

「まだまだ大丈夫だよ」

僕は心の中で思っていた

そんな二人が旅立った

僕が二人に似ているところ

それは体が細いところ

でも 元気いっぱいだった

僕もそんな二人のようになりたい

きつと二人で

天国に旅立ったと思う

「今までありがとう」

「天国で 僕たちを見守っていてね」

心の中で つぶやいた